

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 8 日現在

機関番号：14701

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520158

研究課題名(和文)1900年前後のベルリンにおける日本伝統音楽の受容の研究

研究課題名(英文)The research into the reception of Japanese traditional music before and after 1900 in Berlin.

研究代表者

泉 健 (IZUMI, Ken)

和歌山大学・教育学部・教授

研究者番号：80107995

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 600,000円

研究成果の概要(和文)：独文月刊総合雑誌“Ost=Asien”(1898-1910)の多くの記事を読み解くことによって、川上貞奴一座と烏森芸者一行のベルリン公演(1901年)の様子を詳しく研究することができた。また後者が参加したオペレッタ「ゲイシャ」(西洋人一座による公演)に対する藤代禎助の批評から、当時ベルリン大学に留学していた日本人が、それをどのように受容したかも研究することができた。

さらにベルリンの玉井喜作宅における寄せ書きも覆刻した。これは1900年前後のベルリンにおける日独交流を知る上でも、また科学史や留学史研究などの資料としても、歴史的史料として貴重なものである。

研究成果の概要(英文)：I could studied in detail the performance of the Sadayakko KAWAKAMI company and the Karasumori Geisya company at Berlin 1901 through the many articles of the “Ost=Asien”(1898-1901), that was a German monthly general journal. And I could studied the reception of a Japanese, Teisuke HUIJISHIRO who was studying in Berlin Univercity at that time, about the Operetta “Geisya”, where the Japanese Karasumori Geisya company participated in this performance by Occidental company.

Beside that, I reprinted the collection of autographes that was written in the Kisaku TAMAI's house in Berlin. This is the valuable historic data. Because through this data, we can study the cultural exchange between Japan and Germany before and after 1900 in Berlin. And we can also study the history of science and the history of studying abroad at that time in Berlin.

研究分野：音楽学

キーワード：“Ost=Asien” 玉井喜作 ベルリン 世紀転換期 異文化受容 川上貞奴 烏森芸者 藤代禎助

1. 研究開始当初の背景

日本において西洋音楽がどのように受容されてきたかに関しては、皆川達夫(皆川達夫 2004)、中村洪介(中村洪介 1987,2003)、塚原康子(塚原康子 1993)、中村理平(中村理平 1993)などの浩瀚な研究書を初めとして、実に多くの研究がなされてきた。しかし西洋において日本の伝統音楽がどのように紹介され、また受容されてきたかに関する研究は非常に少ない。演劇分野を中心として、白川宣力(白川宣力 1985)、倉田喜弘(倉田喜弘 1994)、澤田助太郎(澤田助太郎 1996)などの研究がある程度であった。音楽学の分野からの本格的な研究は、ほぼ井上さつき他の研究(井上さつき他 2004)のみであり、この分野の音楽学的研究は始まったばかりであると言える。本研究は、この井上さつき教授グループの研究においては全く触れられていない『Ost=Asien』(1898年-1910年)という別の資料を分析することによって、この問題に関する音楽学分野からの研究をさらに深めていくことを目指している。

2. 研究の目的

明治以降は、西洋音楽の一方的な受容がなされてきたと思われる。本研究は、この期間においても、日本の伝統音楽のヨーロッパへの進出・紹介があったことを、19世紀末から20世紀初頭のベルリンに焦点を合わせ、そこにおける日本伝統音楽の受容の様相を解明しようとするものである。また同時に、世紀転換期のベルリンに在住した日本人が、西洋音楽をどのように受容していったかについても解明することを今一つの目的としている。

3. 研究の方法

1898~1910年(明治31-43)の間にベルリンで刊行されたドイツ語の月刊総合雑誌『Ost=Asien』の中から、まず日本の伝統音楽と日本の演劇に関する論文を調査し、日本

語に翻訳していく。またこの雑誌の目次欄には載っていないが、雑報欄の様々な記事の中には、これらに関する重要な記録がある。しかしそれは、この雑誌を実際に見ながら詳細な調査を行っていかなければならない。そこで、日本でこの雑誌を多く所蔵する京都大学と東京大学に調査に行き、そのようにして見つかった記事も順次日本語に翻訳していく。

また19~20世紀の世紀転換期のドイツ及び同時代の日本に関する書籍、CD、DVDを入手し、文献面と視聴覚面でも、音楽を中心としたこの時代の背景を研究していく。そしてこれらの資料に基づく今回の研究の成果は、講義・演習にも逐次取り入れていきながらさらに研究を深めていく。

4. 研究成果

(1)川上貞奴一座のベルリン公演；1901年 西洋人の受容

川上貞奴・川上音二郎一座に関する記事は“Ost=Asien”にかなり多く載せられており、それらをもとにして、同一座のベルリン公演(1901年)に対するドイツ人を中心とした西洋人の受容を考察した。詳細は拙稿「ベルリンの川上貞奴(1901年)」(泉健 2013: 69-84)に述べたので、ここでは要点のみをまとめておきたい。

川上音二郎と貞奴の意図がどのようなものであったにせよ、それを受容する側は、それぞれの歴史的背景を前提として受容することになるので、そこには様々な反応が生じていたことが理解された。

例えば1900年のパリ万国博覧会で川上貞奴を観たダンカン, I. は、「毎晩、シャルル・アレと私はこのすばらしい伝統芸術に心を踊らせた」(ダンカン, イサドラ 2004: 87)と感激している。また1901年のベルリンでは、新聞評は川上貞奴を絶賛していた。パリでの高い評価の理由は、19世紀後半以降次第に高まっていったジャポニスムの流れ

の中での受容ということだけではないであろう。そこには、第一次世界大戦後に展開していく脱近代的な様式を模索していた諸ジャンルの芸術家たちが、川上一座の公演から何らかのヒントを感受したということもあった。例えば、貞奴の演技が「新時代の前衛芸術が求める「純粹舞踏」のさきがけとして評価された」（柏倉康夫 2004：135）というのもその一例である。同じことはベルリンについても言える。すなわちブライテンシュタイン, S. の批評（ブライテンシュタイン, S. 1902）に見られるように、自然主義演劇から次の様式の演劇に進もうと模索していたところに、川上貞奴の演技がやはり一つのヒントを与えたようである。

日本人の受容

しかし、1900年のパリ万国博覧会から帰国後の川上一座は、日本の演劇（歌舞伎）評論家からは非常に低い評価しか与えられなかった。そこには日本の演劇の歴史的事情が関与していた。すなわち、川上音二郎は歌舞伎を旧派として新たな演劇を企てたにもかかわらず、欧米で演じたのは歌舞伎の、しかも全く別の演目を合体して縮小したようなものであった。これでは歌舞伎の改悪である、という批判が投げかけられることになったのである。そのような改変は、アメリカでの最初の不評から彼我の「趣味の相違」（Ost-Asien Nr. 29 1900：221）を感じ取り、「外国の観客の趣味に調子を合わせる」（Ost-Asien Nr. 29 1900：221）ということから生じたものであった。そこには、西洋のエキゾティシズムに自らを合わせていくという方向のベクトルも働いたであろう。これも異文化接触における文化変容の一種と考えられ得る。しかし、受容する側の歴史的背景が異なれば、日本の場合のようにそれが否定的に受け取られることにもなった。

文化相対主義から本質主義批判へ

現在の民族音楽学においては、あるいは

もっと広くは文化研究一般においても、その出発点となっているのは次のような認識である。すなわち、これまで「各文化の「本質」として指定されてきた特徴自体が、他文化の言説との接触や混交の中で「構築」されたもの」（渡辺裕 2007：211）であり、「今のわれわれの「伝統」観自体が価値観の不断の変化の歴史の一断面にすぎない」（渡辺裕 2004：269）ということである。川上一座の欧米と日本での評価の相違も、このような新たな視点に基づいて、もっと多くの資料をもとに一層緻密な研究を継続していく必要があるであろう。

なお今回の研究の過程において、12音音楽の作曲家シェーンベルク, A. と川上貞奴が、1901年12月にベルリンの同じブンテ劇場で働いていたという事実を確認できたことは興味深いことであった。

(2) 烏森芸者のベルリン公演；1901年

烏森芸者の足跡；パリからベルリンへ

烏森芸者一行の日本出発は1900年（明治33）2月16日であり、帰国は1902年（明治35）1月3日であった。この2年近くの長旅の主要な目的は、1900年（明治33）のパリ万国博覧会に出演することであったが、その後、一行は西欧を巡業してまわっている。ベルリンでの公演はその途中の出来事であった。今回の研究ではこれまで紹介されていない“Ost=Asien”の記事や、玉井喜作宅における寄せ書きなどに基づいて、烏森芸者のベルリンでの日々を詳しく再現した。詳細は拙稿「藤代禎助「オペレッタ；ゲイシャ」(1901年)とベルリンの烏森芸者」(泉健 2014a)で詳述したので、ここでは要点のみを記しておきたい。

『ゲイシャ』(1896)の歴史的位置

日本を題材とした19世紀末のオペレッタ『ミカド』(1885)と『ゲイシャ』(1896)の社会的背景を考察すると、次のようなこと

がわかる。日本は日清戦争(1894-1895/明治27-28)から日露戦争(1904-1905/明治37-38)の過程で、徐々に産業革命を押し進めていき、次第に帝国主義国家の仲間入りをしていくことになった。その結果、日本は西欧人にとって、オペレッタ『ゲイシャ』に描かれたような「気晴らしの国」(橋本順光 2003:40)ではなくなっていった。

『ゲイシャ』は日清戦争終了の翌年に初演され、日露戦争が勃発した年は、オペラ『蝶々夫人』の初演の年でもあった。このような歴史的経緯を考えると、『ゲイシャ』(1896)は、『ミカド』(1885)と『蝶々夫人』(1904)をつなぐ、いわば失われた環のような存在」(橋本順光 2003:30)であり、「日本への異国情緒が、喜劇から悲劇へと移り変わる分水嶺の役割を果たす位置にある」(長木誠司 2007:13)作品であると言える。

日本人の受容

烏森芸者の一行がベルリンに到着した頃、当地では西洋人一座(国籍・団体名不詳)によるオペレッタ『ゲイシャ』が上演されていた。烏森芸者はその公演に参加した。後に独文学者となる藤代禎助は、当時ベルリン大学に留学しており、この公演を観ている。彼はその批評を“Ost=Asien”に書いた。その批評の大部分は、日本の習俗がきちんと理解されていないという点に集中していた。

確かに初演から100年あまりを経た現代では、この作品の歴史的な位置を明確に把握することができ、登場人物の文化記号論的な分析も可能である。しかし当時実際にこれを観た日本人は、『国民之友』の英語版『The Far East』の編集長であった深井英五にせよ、アメリカとイギリスで詩人として活躍していた野口米次郎にせよ、『ゲイシャ』における日本のこのような描かれ方に対して憤慨していた(橋本順光 2003:39-41)。

従って、後に京都帝国大学独文科の初代教授となった藤代禎助(当時33歳)が、この

作品を観て、日本の習俗の誤解に焦点を絞って批評を行ったことは無理もないことと言えるであろう。これは、帝国主義国家への道をひた走りに進んでいた当時の日本のエリート達にとって、共通する受容の仕方であったものと思われる。

西洋人の受容

当時ベルリン大学附属東洋語学校日本語講師を務めていた児童文学者の巖谷小波(季雄)も、烏森芸者が加わった「ゲイシャ」の公演を観ていた。帰国後の彼の著作『洋行土産』には、同席したドイツ人を中心とする西洋人が、この公演を興奮と感動の内に受容していた様子が描かれている(巖谷小波(季雄)1903下:78-85)。

その背景には19世紀後半以降、特にフランスを中心として広まったジャポニズムの影響がまず考えられる。そしてまた、西洋では失われつつあった女性像を、彼らがこの作品の中に求めたということも考えられる。すなわち、西洋では19世紀に産業革命の進行とともに工業化が進み、女性の社会進出も次第に顕著になっていった。それに伴って、家庭とともにある女性という従来の姿は次第に希薄になっていき、西洋の男性は、その従来の姿を日本の女性に見いだそうとしたという構図である。

“Ost=Asien” 日本伝統音楽関係記事

今回の研究では、藤代禎助の『ゲイシャ』への批評が掲載された前後の“Ost=Asien”誌における、その他の日本音楽関係記事などもいくつか紹介した。北里蘭の「日本の演劇」や、フローレンツ,K.が翻訳し、縮緬本として出版された『日本の演劇;『寺子屋』と『朝顔』』を紹介するグラマツキー,A.の文章など、“Ost=Asien”には興味深い論文や記事がいくつも存在することがわかった。

(3) 『玉井喜作宅における寄せ書き』覆刻 二つのタイムカプセル

19世紀末から20世紀初頭のベルリンを知る上で、二つの興味深い史料が存在する。一つは玉井喜作が発行した“Ost=Asien”というドイツ語の月間総合雑誌であり、今一つは、ベルリンの『玉井喜作宅における寄せ書き』（以下『寄せ書き』と略記）である。前者はパブリックなタイムカプセル、後者はプライベートなタイムカプセルと言える。いずれも、世紀転換期ベルリンの様子を生き生きと伝える貴重な歴史的資料と言える。今回の研究の機会に、この『寄せ書き』を復刻した（泉健 2014b）。

『寄せ書き』に見る若きエリートたち

これは、“Ost=Asien”の創刊者玉井喜作の家を訪問した人びとが記念に書いたものである。記述は1900年（明治33）3月30日に始まり、1906年（明治39）3月15日で終わっている。この時期は、“Ost=Asien”の2巻から8巻までが刊行されていた時であり、玉井喜作が同誌の主筆・編集を務めていた。

『寄せ書き』を書いた人物は、学者、医者、官僚、軍人、民間人などであった。当時ベルリンに留学していたのは、日本の各分野の若きエリートたちである。『寄せ書き』を繙いていくと、後に学問の世界で名をなした人物や、政界財界などで活躍した人物などの筆跡が多く見られる。国際連盟事務次長も務めた新渡戸稲造、天皇機関説の美濃部達吉、物理学の長岡半太郎（1900年にパリで開催された万国物理学会の途次）、独文学の藤代禎助、大村仁太郎、辻高衡（ベルリン東洋語学校講師）、国文学の芳賀矢一、昆虫分類学の松村松年などである。また陸軍大佐長岡外史や、玉井喜作と東京大学予備門の同期で医者の賀古桃次（森鷗外の親友賀古鶴戸の弟）などの筆跡も見られ興味深い。

『寄せ書き』に見る川上貞奴と烏森芸者

一方、日本伝統芸能の演者なども玉井喜作の家を訪れており、川上貞奴一座や烏森芸者一行の筆跡も見ることができる。烏森芸者一

行の世話役を担当していたのが、後に大逆事件で処刑された奥宮健之であり、その署名も『寄せ書き』に載っている。この両グループの寄せ書きに関しては、読みやすいように活字体を並記して復刻した（泉健 2013:74-75、泉健 2014a:73-74）。

歴史資料としての『寄せ書き』の価値

この『寄せ書き』には、また歴史資料としての価値もある。例えば烏森芸者の一行は、ベル・アリアンス劇場での公演中、1901年5月18日に玉井喜作の家を訪問している。当日の『寄せ書き』を見ると、その時に藤代禎助も同席していたことがわかる（泉健 2014a:72）。既述のように藤代禎助は、その後、烏森芸者の一行も加わったオペレッタ『ゲイシャ』の批評を“Ost=Asien”に載せている。このように、この『寄せ書き』は、当時のベルリンのことを研究する上でも貴重な歴史的資料と言える。既述の“Ost=Asien”と同じように、この『寄せ書き』も、各分野の専門家がそれぞれの関心に応じて様々な切り口からこれを繙いてみれば、そこに世紀転換期ベルリンの諸相が、多彩な表情を持って立ち現れるであろう。

<引用文献；和文>

泉 健「ベルリンの川上貞奴（1901年）」『和歌山大学教育学部紀要 人文科学』第63集 2013年 pp.69-84.

同「藤代禎助「オペレッタ；ゲイシャ」（1901年）とベルリンの烏森芸者」『和歌山大学教育学部紀要 人文科学』第64集 2014a年 pp.65-80.

同 編著『玉井喜作宅における寄せ書き』研究費による公費出版、2014b年

井上さつき他『日本音楽・芸能をめぐる異文化接触メカニズムの研究』（平成13-15年度科学研究費補助金研究成果報告書、2004）

巖谷小波（季雄）

1903 『洋行土産』上下2巻、博文館
柏倉康夫「貞奴とハナコの日本～身体の表
象」山内久明他『表象としての日本～西洋
人の見た日本文化』日本放送出版協会、2
004 pp.127-140.

倉田喜弘『海外公演事始』東京書籍、1994
澤田助太郎『ロダンと花子』中日新聞社、1996
白川宣力編著『川上音二郎・貞奴』雄松堂出
版、1985

ダンカン,イサドラ

2004『魂の燃ゆるままに イサドラ・ダン
カン自伝』(山川亜希子他訳) 富山房イン
ターナショナル

長木誠司

2007「シドニー・ジョーンズ/ミュージカ
ル・プレイ ザ・芸者 が教えること」東
京室内歌劇場編『オペレッタ ザ・芸者
THE GEISHA 東京室内歌劇場 39期第117
回定期公演プログラム』,pp.10-13.

塚原康子『十九世紀の日本における西洋音楽
の受容』多賀出版、1993

中村洪介『西洋の音、日本の音』春秋社、1987
同『近代日本洋楽史序説』東京書籍、2003

中村理平『洋楽導入者の軌跡』刀水書房、1993
橋本順光

2003「茶屋の天使 英国世紀末のオペレッ
タ『ゲイシャ』(1896)とその歴史的文脈
」『ジャポニスム研究』23号,pp.30-50.

皆川達夫『洋楽渡来考』日本キリスト教団出
版局、2004

渡辺裕「《春の海》はなぜ「日本的」なのか」
根岸一美他編『音楽学を学ぶ人のため
に』世界思想社、2004 pp.264-280.

同「音楽学と音楽文化」徳丸吉彦他編『事典
世界音楽の本』岩波書店、2007 pp.210-212.

<引用文献；欧文>

Anon., Die japanische Kawakami-Truppe
in Paris. "Ost=Asien" Nr.29. 1900
August -5, s.221.

Breitenstein, Schmidt., Sada Yakko und
die deutsche Schauspielkunst.

"Ost=Asien" Nr.49a. 1902 April -1,
s.28f.

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計2件)

泉 健

「藤代禎助「オペレッタ；ゲイシャ」(1901
年)とベルリンの烏森芸者」『和歌山大学
教育学部紀要 人文科学』第64集 2014年
pp.65-80. 査読無し

泉 健

「ベルリンの川上貞奴(1901年)」『和歌山
大学教育学部紀要 人文科学』第63集 2013
年 pp.69-84. 査読無し

[図書](計1件)

泉 健編著

『玉井喜作宅における寄せ書き』研究費に
よる公費出版、2014年12月24日発行、
印刷；和歌山印刷株式会社、A5版全123
ページ60部覆刻

[その他]

研究代表者 泉 健作成のホームページ
「玉井喜作記念館」
<http://www2u.biglobe.ne.jp/~izumi>

6. 研究組織

(1)研究代表者

泉 健 (IZUMI, Ken)
和歌山大学・教育学部・教授
研究者番号：80107995

(2)研究分担者

(無し)

(3)連携研究者

(無し)